

中学校国語教科書の古典内容の変化における一考察

On the Evolution of the Classical Literature in Middle School Education in Japan

柯 勁松*¹

(jingsongk@hotmail.com)

畢 春玲*²

(syunrei_jp@yahoo.co.jp)

キーワード：国語教科書 古典文学教材 中学校 学習指導要領 戦後

Abstract: Education in history never stays the same; it is ever changing with the evolution of the society. And the adoption of a certain education, either in the textual sense or in the methodological sense, is closely related to the social, cultural, economic situations of that time. This is also the case with the Japanese education. Ever since the Second World War, due to various reasons the Japanese textbooks applied to middle school education in Japan have always been changing, especially the classical part which is generally supposed to be a reflection of cultural essence of a country. Based on the Japanese textbooks published by MITSUMURATOSHO press during a period of about 60 years from the Second World War to date, this paper makes a comparison between the different versions of the textbooks in terms of the classical literature adopted in these textbooks. Through listing and comparing the quantity and the content of the classical literature in different times and explaining the background information of each version, the paper aims to make a tentative research on the relevant social, cultural and educational realities that may give rise to the changes in this regard, and therefore promote the understanding of the relationship between social mentalities and education.

はじめに

文部科学省の定める「学習指導要領」は学校の教育計画（カリキュラム）の基準となるが、戦後、昭和26年改訂版「中学校、高等学校学習指導要領（試案）」から、ほぼ10年単位で改訂され、その都度、教科ごと・学年ごとに、学習の目標や内容などが明示される。これを受けて、教科書会社が教科書を編集・製作するが、この教科書は学習指導要領というカリキュラムの基準を具体化した生の素材といえる。生徒たちが教科書を通じてその基となっている学習指導要領の示す学習内容を理解し、学校教育の目標に達するわけである。

本稿では、戦後から現在までの中学校国語教科書の各年版、すなわち昭和30年版から現行の平成18年版を対象に、その中の古典文学教材の内容変遷を分析・考察する。作業の便宜上、一つの代表的な教科書会社——「光村図書」の教科書を分析対象にしているが、その主な理

*¹ 柯 勁松 東北師範大学博士課程在学、非常勤講師

*² 畢 春玲 ハルビン工業大学講師

由は以下の二つである。一つは、現在では中学校の国語教科書として使われている5種類の出版社（教育出版、東京書籍、光村図書、三省堂、学校図書）の中においても、教科書採択率（中学国語科）でNo.1というのが光村図書であることだ（例えば、2005年度は40%）。もう一つは、中国では正規学校以外の学習塾や訓練センターなどの教育施設の日本語学習者に最も多く使用されている教材である「中日交流標準日本語」は、中国の人民教育出版社と日本の光村図書により共同で編纂されており、また、他社より一歩進んで光村図書が「光村国語デジタル教科書」を発行し、ICT（情報コミュニケーション技術）活用教育の実践現場でも活躍しているなどのことから、「光村図書」は多分野、多領域にわたって代表性を有することがいえる。したがって、その教科書を分析することによって戦後60年間の教科書内容（古典文学）の変化を見ることができると考えられる。

I. 光村図書の中学国語教科書

まず、戦後各年版の（光村図書）中学校三年間国語教材の古典教材についてその量的変化を見ておこう。

表1：全教材数に占める古典教材の割合

各年版 \ 学 年	一年	二年	三年	三年間合計
昭30年	1/22	7/26	8/21	16/69
昭34年	0/30	4/26	4/31	8/87
昭37年	3/22	4/21	4/26	11/69
昭41年	4/23	3/21	4/25	11/69
昭44年	3/24	3/21	4/25	10/70
昭47年	4/22	4/24	4/28	12/74
昭50年	4/22	4/24	4/28	12/74
昭53年	3/20	3/20	4/21	10/61
昭56年	3/20	3/20	4/20	10/60
昭59年	3/19	3/18	4/18	10/55
昭62年	4/21	3/20	4/20	11/61
平2年	3/19	3/19	4/20	10/58
平5年	3/18	3/18	4/18	10/54
平9年	3/20	3/20	4/20	10/60
平14年	2/14	3/16	3/17	8/47
平18年	3/18	4/21	4/21	11/60

（柯勁松が「光村図書」中学校国語教科書各年版より本表を作成）

中学校国語教科書の古典内容の変化における一考察

1. 一年目：昭和30年版と昭和34年版では、古典教材数はそれぞれ1と0で極めて少なかったが、その後の各年版において、ほとんど3編や4編となり（平成14年版を除く）、全教材数が18から24まで大きく変動していたにもかかわらず、古典作品の採録数がほぼ一定している。
2. 二年目：昭和30年版では古典作品採録数が一気に一年目の1から7と変わり、量的には著しく多かったが、内容的にも漢文や随筆、物語、狂言、解説など幅広く各領域をわたっていたのである（表3を参照）。その後、昭和33年の学習指導要領の全面改訂を受け、昭和34年版教科書から古典教材数は4までに減り、その後も4編か3編で年間の分量がほとんど変わらず、現行の平成18年版まで続いている。ただし、年間全教材数は最少時の16から最多時の26まで大きく変化している。
3. 三年目：昭和30年版では二年目の古典内容の増加傾向はさらに進んで、三年目の8編となったが、その次の昭和34年版から4編と変わり、平成14年版を除いて現行の平成18年版までずっと変化していない。ただし、年間全教材数の波動は17から31までと三つの学年の中で最も激しいのである。
4. 中学三年間の古典教材総数については、昭和30年版では16編で最も多く、その次の昭和34年版では急に半分削減されたが、その後の各年版（平成14年版を除く）では、大きな変化が見られず、平均値が10.6となっている。しかし、平成14年版では「ゆとり教育重視」を背景に、古典教材数は8編までに減少し、再び昭和34年版の低レベルに戻っていた。ただし、両者の三年間全教材数を比較すると、47と87で前者はほぼ後者の半分しかない。すなわち、大筋を見ると、戦後から続いている教育内容の削減に伴って、教科書に掲載する古典作品の量的減少は近・現代文学作品のそれに比例しないことがわかった。また、昭和34年版と平成14年版を除いて、各年版の三年間の全教材数については、昭和53年版を境に、前半のものは約70編前後に対し、後半のそれは約60編前後となっている。これは昭和52年の学習指導要領改訂では「ゆとりと充実」というスローガンのもとで、教育内容の精選や授業時数の削減などが進められつつあることに原因があると考えられる。

II. 一年目教材についての考察

次は、学年ごとに古典教材の採録内容の変化を見てみる。

表2：中学一年の古典教材内容

文 種 各 年 版	解説	漢文 (中国古典)	古文（日本の古典）					
			随筆	物語・小説	紀行	和歌	芸能	
昭30年				東海道中 膝栗毛				
昭34年								
昭37年				1,海幸山幸 2,目のわるい三人				はぎ大名 (狂言)
昭41年		中国の 故事物語		1,馬盗人 ^{注1} 2,琵琶の名人 ^{注1}				同上
昭44年		同上	蘭学事始	馬盗人 ^{注1}				
昭47年	日本人の 季節感			琵琶の 名人 ^{注1}		雪とけて		柿山伏 (狂言)
昭50年	同上			実因僧都 の強力 ^{注1}		同上		同上
昭53年	同上			同上		四季おりおり		
昭56年		故事から生 まれた言葉		1,阿蘇の史 ^{注1} 2,蓬萊の 玉の枝 ^{注2}				
昭59年		同上		同上				
昭62年	古典に学ぶ	同上		蓬萊の玉 の枝 ^{注2}		空のうた		
平2年		同上		同上		同上		
平5年	むかしむかし、 うらしまは	同上		同上				
平9年	同上	同上		同上				
平14年		今に生き る言葉		竹取物語				
平18年		同上		蓬萊の玉 の枝 ^{注2}		いろは歌		

(柯勁松が「光村図書」中学校国語教科書各年版より本表を作成)
(注1：今昔物語集から 注2：竹取物語から)

1. 昭和56年版から漢文の内容は定番となっているのに対して、それ以前ではあまり採録されていなかった。また、昭和53年版までは一年目と二年目（表3を参照）のいずれの学年に、伝統芸能の内容（すべては狂言）は必ず取り上げられていたが、その後、一度も姿が現れることがない。これらは昭和52年から実施していた「ゆとりと充実」をスロー

中学校国語教科書の古典内容の変化における一考察

ガンにした教育改革における「教育内容の精選」から、その根拠が見つかるだろう。

2. 昭和41年版から昭和56年版まで、今昔物語の内容は出ていたが、その後、竹取物語の内容に替えられ、後者は定番となっている。他の教科書会社4社の中学校国語教科書を見ても、最近の各年版では今昔物語の内容がほとんど採録されていない。

Ⅲ. 二年目教材についての考察

表3：中学二年の古典教材内容

各 年 種 版	解説	漢文 (中国古典)	古文(日本の古典)				
			随筆	物語・小説	紀行	和歌	芸能
昭30年	漢語の 組み立て	1,故事成語 2,金言 3,詩	蘭学事始	源平合戦 ^{注3}			狂言「かう やくねり」
昭34年		静夜思	神無月の ころ ^{注4}	扇の的 ^{注3}			清水 (狂言)
昭37年		1,中国の故事物語 2,静夜思	同上	同上			
昭41年			1,蘭学事始 2,堀池の僧正 ^{注4}	那須与一 ^{注3}			
昭44年			堀池の僧 正 ^{注4}	同上			附子 (狂言)
昭47年	日本の古典	中国の名言	同上	足ずり ^{注3}			
昭50年	同上	同上	同上	同上			
昭53年		同上	同上	同上			
昭56年		漢詩の風景	神無月の ころ ^{注4}	扇の的 ^{注3}			
昭59年		同上	同上	同上			
昭62年		同上	同上	同上			
平2年		同上	同上	同上			
平5年		同上	思いをつ づる ^{注4注5}	同上			
平9年		同上	同上	同上			
平14年		同上	同上	同上			
平18年		同上	1,枕草子 2,仁和 寺にある法師 ^{注4}	同上			

(柯勁松が「光村図書」中学校国語教科書各年版より本表を作成)
(注3：平家物語から 注4：徒然草から 注5：枕草子から)

1. 昭和41年版と昭和44年版では、二年目で漢文の内容がなかったが、その代わりに一年目で漢文を取り扱ったのである。昭和53年版までのほかの各年版はその逆で、一年目なし、二年目採録となっていた。昭和56年版以降、一年と二年はともに漢文を採録してあ

る。ただし、一年目は故事成語（「矛盾」）、二年目は漢詩（「春暁」「絶句」「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」）で両者ともに定番となっている。

2. 取り上げられた段・内容の変化があったものの、平家物語と徒然草は戦後から現行までずっと二年生の定番（昭和30年版のみは徒然草が三年目。表4を参照）となっている。

IV. 三年目教材についての考察

表4：中学三年の古典教材内容

文種 各年版	解説	漢文 (中国古典)	古文（日本の古典）				
			随筆	物語・小説	紀行	和歌	芸能
昭30年	1.漢文を読む 2.日本の古典について	1.「論語」から 2.「唐詩選」から	1.つれづれ草 2.枕草子		奥の細道	万葉秀歌	
昭34年	日本の美の伝統	孔子と孟子のことば			夏草 ^{注7}	さわらび ^{注6}	
昭37年	同上	温故知新 (論語・孟子)			同上	同上	
昭41年	同上	同上			同上	豊旗雲 ^{注6}	
昭44年	同上	同上			同上	同上	
昭47年	同上	唐詩鑑賞	うつくしきもの ^{注5}			同上	
昭50年	同上	同上	同上			同上	
昭53年	古典を読む	春暁			同上	天の香具山 ^{注6}	
昭56年		学びて時にこれを習ふ (論語から)	春はあけほの ^{注5}		同上	さわらび -万葉・古今・新古今 ^{注6}	
昭59年		同上	同上		同上	同上	
昭62年		同上	同上		同上	同上	
平2年		同上	同上		同上	同上	
平5年		同上		東下り ^{注8}	同上	君待つと -万葉・古今・新古今 ^{注6}	
平9年		同上		同上	同上	同上	
平14年		項羽(「史記」から)			同上	同上	
平18年		学びて時にこれを習ふ (論語から)			同上	1.古今和歌集 仮名序 2.君待つと -万葉・古今・新古今 ^{注6}	

(柯勁松が「光村図書」中学校国語教科書各年版より本表を作成)

(注5：枕草子から 注6：三大集から 注7：おくのほそ道から 注8：伊勢物語から)

1. 昭和47年版から、ゆとり教育改革を特徴とする昭和53年版を除いて、枕草子はほぼ定番(平成5年版以降は二年目)となっている。
2. 昭和56年版から現行の平成18年版まで、漢文では「論語」がほぼ定番(平成14年版を除く)となっている。
3. 三大集とおくのほそ道は、戦後から一貫して中学三年目の変わらぬ内容(昭和47年版と昭和50年版では「おくのほそ道」は抜けていた)となって、古典教材としての固い地位を示している。

V. 各考察のまとめ

1. 昭和30年版では、一年目でわずか1編の古典内容しかなかったが、二年と三年になると、急にそれぞれ7編と8編となり、古典に触れる時期は中学二年からという傾向が見られていた。その後の各年版(昭和34年版と平成14年版を除く)の中学三年間古典教材総数が平均的に見て約10.6となっているのに対して、それが16編でとても目立っている。これは戦後初めての検定教科書ということもあり、また、戦後最初の昭和26年改訂版「中学校、高等学校学習指導要領国語科編(試案)」にも指摘してあるように、「これまで(戦前——筆者注)の国語教育、ことに中等学校以上の国語教育は、教室の中で古典を読んだり、名文を読んだりすることをおもな仕事としていた」とされているため、昭和30年版教科書の教育理念としては、修正をしたものの、戦前の古典文学教育重視の延長線にあったことがいえるだろう。
2. 昭和33年「学習指導要領」の全面改訂を受けて、昭和34年版国語教科書では、一年目で古典にあまり触れないという昭和30年版の方針には変わりがないようだが、二年、三年で古典作品数(旧版では7と8)がともに4までに減り、内容も大きく変わっている。その次の昭和37年版では、一年目で3編の作品となって古典に触れる適切な時期が中学校に入ってすぐとされたようである。二年と三年の古典作品数は旧版とほとんど変わらず、その後の各年版でも一年目に載せる作品数も含めて、大体3編か4編でほぼ一定している。
3. 平成14年版では、以前の各年版と比べると、一年の作品数が3から2に、三年のそれが4から3に、計2編(20%)が減少した。その背景として、平成14年度はゆとり教育の重要性が叫ばれ、指導内容が大きく削減された年であったことが挙げられる。13年度まで使用の中学校国語教科書(光村図書)に掲載されていた日本で文豪と呼ばれる作家——夏目漱石、森鷗外の作品が消えている。これは古典作品の採録にも影響を与えたといえよう。しかし、この内容削減に対し批判も多く、次回改訂の平成18年版には文豪たちの文章が復活したと同様に、古典作品の三年間合計採録数もほぼ元通りになった(11編で平成2年版以来の10編よりもやや多い)。また、作品の内容については、削減された定番の「論語」の復活や、古文理解のために意義がある「いろは歌」の新規掲載など、平成18年版が評価できる。

4. 古文は、一年目→竹取物語、二年目→平家物語+徒然草+枕草子、三年目→三大集+おくのほそ道、漢文は、一年目→故事成語、二年目→漢詩、三年目→論語、のようなほぼ定番といえる内容が戦後60年間の変化の中においても、おおむね定着しているといえよう。

おわりに

今回の研究では、現行の教科書の中で光村図書の一社のみを対象に分析をした。これからの研究を発展させる方向として、今回取り上げなかったほかの4社（東京書籍、教育出版、三省堂、学校図書）と比較し、会社別の古典教材採録の傾向やその特徴を時代の流れとともに見ていく研究と、高等学校の教科書に採られた古典教材とを合わせた比較研究とが考えられる。

参考文献：

1. 「中学校国語」1、2、3、光村図書出版株式会社、昭和30年版から平成18年版までの各年版。
2. 昭和26年改訂版「中学校、高等学校学習指導要領 国語科編（試案）」
3. 「中学校学習指導要領(国語)」昭和33年版、昭和44年版、昭和52年版、平成元年版、平成10年版。
4. 「平成18年度版中学校国語教科書の古典教材」中島和歌子、
<http://www.sap.hokkyodai.ac.jp/~nakajima/waka/data/kotenj18.html>
5. 「文学教材研究における観点のもち方」松野洋人、
http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyoka_info/kokugo/kokugo_c/pdf/kouhoushi_c5410.pdf